

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 15 日現在

機関番号：32629

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520758

研究課題名(和文) 早期英語から中学校英語への架け橋：文字教育を取り入れた指導法と教材モデル開発研究

研究課題名(英文) A Study Exploring Models of Instructions Focusing on the Relationship among Letters, Sounds, and Meaning of the Words, and Materials for Early English Education in Japan

研究代表者

小野 尚美 (ONO, NAOMI)

成蹊大学・文学部・教授

研究者番号：10259111

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、英語圏で実施されている読み書き能力回復プログラム(Reading Recovery Program)(RRと略記)について研究し、その指導理念と指導方針を日本の早期英語教育に応用する指導法及び教材モデル開発を目指した。オーストラリア、ニュージーランド、米国、カナダへ出張し、RRの教員及びLeader研修にも参加したことにより、このプログラムの理解を深めることができた。日本の小学生にこの考え方を応用して、文字、音、意味の理解を念頭に置き、文字及びフォニックス指導を取り入れた読み書きタスクを実践した結果、児童の英語の理解を深めることができるという示唆を得ることができた。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study is to learn the concept and teaching method of Reading Recovery Program and to explore how to apply it to English teaching for elementary school students in Japan. Reading Recovery Program emphasizes the importance of teaching the relationship among sounds, letters, and meaning of the words to help improve the students' reading and writing ability. It also proposes that the students' background knowledge should be activated to promote learning.

In this research we taught English to the 5th and 6th graders learning English in Japan by applying the principles of Reading Recovery Program. It was found that the students' awareness of the relationship between letters and sounds increased and they got used to reading and writing in English. The research also shows that the Japanese students need to learn the relationships among letters, sounds and meaning in order to become proficient in English.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：Reading Recovery Program 小学校英語 Emergent Literacy

1. 研究開始当初の背景

2009年の科研報告『中学校及び高等学校の英語教育に連携する小学校英語の指導内容・方法の開発研究』(平成18年度、基盤研究(C)、研究課題番号18520454)では、「学びは全体から部分へ進む」を理念としたWhole Language理論に基づいた指導方法で日本人小学生に英語を教え、量的及び質的分析を行なうことによってその効果を報告した(小野、他4名)。現在、日本の公立小学校の英語活動において「アルファベットの活字体の大文字及び小文字にふれる段階にとどめる」「読むこと及び書くことについては、音声面を中心とした指導を補助する程度の扱い」となっている(文部科学省、p.19)。そこでこの研究は、1)第二言語及び外国語教育において書き言葉(文字)の指導は有効に働くことが様々な研究からの示唆を受けたこと、さらに2)欧米の言語教育で支持されているWhole Language理論も、話し言葉と書き言葉を実際に使用することによって実践的コミュニケーション能力が育成できるという考え方から始まった。

この研究報告では、Whole Language理論に基づく指導法で教えた小学生のクラスを実験群とし、「部分から全体へ」と進むボトム・アップ的指導法で教えた小学生のクラスを統制群として、量的及び質的分析を通して彼らの英語習得の様子を比較した。さらに同じ小学生が中学に進学してから英語の追跡復習テストも行い、Whole Language理論に基づく指導法の影響について調査を行なった。特にWritingテストの量的分析の結果、実験群の小学生は、Writingの課題において、使用した異語数が統制群の生徒を上回り、さらに

統語上の発展という観点から行なった質的分析結果から、実験群の小学生の方が、英語の統語についての意識と知識の発展がより顕著に現れていることがわかった。

しかし、この研究報告では、日本人小学生の英語学習における新たな問題点として、アルファベット文字指導の重要性が明らかになった。例えば、上記のWritingのデータ分析で、日本人小学生は、アルファベットを使って英語で書くための方略的言語能力(Strategic Competence)として、しばしば自分が聞いて理解した英語の音や自分自身の発音(口頭英語)を頼りに英語で表現している。しかし、日本語、カタカナ、ローマ字を混ぜて表現しており、そのことが彼らのアルファベット文字の理解及び使用、英語の音声の理解を妨げる可能性があると考えられた。実際に、これらの生徒が中学へ進学してから行なった英語の追跡復習テストでは、彼等が小学校で習った英語表現を使おうとしているが「正確さ」の点で不十分であり「うる覚え」の学生が多かったことから、アルファベット文字理解の不十分さが後の英語習得に影響することが明らかになった。このことから、日本人の小学生のアルファベット文字の理解と表現における躓きは、中学校における英語の読み書きの躓きにも繋がるものと考えられる。このような経緯から、アルファベット文字と音素の関係について教えることが、英語を外国語として学ぶ小学生の英語による話し言葉と読み書き能力養成を助け、中学校での英語学習へ繋げるために急務であると考えに至った。

本研究の核となるReading Recovery Programは、1970年代に、最初は英語を母語

とする小学生の読み書き能力矯正を目的としたプログラムとして、ニュージーランド人教育者の Marie M. Clay によって開発されたのだが、その特徴は、小学校に上がる前の子供が話したり聞いたりすることによって得た言語知識を、適切な音素認識の要素を入れた文字指導を通して書き言葉に繋げ、子供の読み書き能力を改善していくというものである (Clay, 1991)。このプログラムは、アメリカやイギリスを始めとした主な英語圏では、その効果が報告されて話題となっており、現在では英語を外国語として学ぶ小学生への効果も報告され、さらにはスペイン語などの他の言語教育に応用したプログラムも開発され、その効果も報告されている。そこで本研究は、読み書きに躓いた小学生のための、文字指導と音素認識の訓練を含む Reading Recovery Program の指導方法と使用教材を研究し、「音声英語」と「英語による読み書き教育」を融合させ、日本の学習風土に適した小学校英語指導法とモデル教材の開発を目指すことを目的としている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ニュージーランドで開発され、その後アメリカを始め英語圏で効果をあげている英語を母語として学んでいる小学生のための読み書き矯正プログラムである『Reading Recovery Program』と、そこで使用されている教材についての調査結果に基づき、日本の中学校に連携する小学校英語の指導法と教材モデル開発をすることにある。特に本研究では、「音声英語」と「英語による読み書き教育」をいかに融合させて指導するかをテーマとし、小学生が躓きやすいアルファベット文字の理解を助けるタスクを

中心とした指導法及び教材モデル開発を目指す。

3. 研究の方法

欧米諸国で効果が認められている読み書き矯正プログラムである Reading Recovery Program は、日本ではほとんど知られていないことから、本研究では、文献や書籍からの研究だけではなく、実際に行われている現場を視察し、その実態について学ぶために、平成 23 年と 24 年には Reading Recovery Program の発祥の地ニュージーランドを始めとしオーストラリアやカナダへ研修参観に行った。また、日本の小学校英語の現場に適した指導法とモデル教材開発を目的としているため、実際に日本の公立小学校で英語を勉強している児童に対し、その指導法で教えた内容に基づいたテストを行い、個々の問題形式や内容への児童の反応から、問題点を探り、授業やテストの改善に資することを目指した。さらに、Reading Recovery Program における言語教育に関する発表が行われている学会に参加し、指導方法及び教材についての知識を深め、多くの英語教育関係者等と意見交換を行なうことで、研究の質の向上を目指した。

平成 23 年度

<4 月 - 7 月> Reading Recovery Program の発祥地であるニュージーランドでのプログラムを始めとし、イギリス及びアメリカで実際にどのように Reading Recovery Program が行なわれているか文献調査を行なった。尚、小学校英語教育のカリキュラム及び教授法、小・中学校英語教育の連携についての研究を続けておられる高梨庸雄教授（弘前大学名誉教授）に研究協力者として本研究の全過程にご参加いただき、欧米の読み書き教育を日本

の早期英語教育に応用する方法を模索する
この研究の成果がより実現性の高いものにな
った。

<8月> Reading Recovery Program 発祥の地
であるニュージーランド及びオーストラリ
アを訪問し、Reading Recovery の指導及び教
員研修について学んだ。この 2 つの国で
Reading Recovery Program の生徒指導の様子
を参観し、実際のプログラム指導者にインタ
ビューを行ない、このプログラムについての
理解を深めた。さらに、このプログラムで使
われている教材について調査した。

<9月-3月> ニュージーランド研修の
結果のまとめと教材研究を行なった。ニュ
ージーランドの読み書き矯正プログラムと日
本の早期英語教育とは学習環境が異なるの
で、日本の教育状況に合った外国語としての
英語指導法研究と教材研究を行なった。この
間、区立小学校の教員からの意見を得ながら、
平成 24 年から始まる実験授業のための指導
案作成と教材開発（教材選択基準の作成な
ど）を行った。

平成 24 年度

<4月-9月> 平成 23 年度に行ったオ
ーストラリア及びニュージーランド研修の成
果を著書にまとめる作業を開始した。実際に
この 2 国へ赴き Reading Recovery Program の
参観をすると、それまで本やネットの資料等
で学んだこと以上の情報を得ることができ
たため、指導法開発をしながら研修結果を踏
まえた著書を作成することにした。また、開
発した Reading Recovery Program での指導
方法について現場の RR 教員や RR 教員リーダ
ー及び RR トレーナーと意見交換をするため
Washington, D.C. で開催された 2012

Reading Recovery Teacher Leader Institute に参
加した。そこでは、実際に使われている
Reading Recovery Program のための教材を購
入することができた。

都内の英語教室で小学生に英語を教えて
いる区立の英語講師の先生をお願いして、
Reading Recovery の考え方を応用した指導方
法で実験授業をすることになり、教え方及び
教材についての準備を始めた。

<9月後半から 10月初旬> カナダ(オンタ
リオ州トロント)で行われている Reading
Recovery Program の指導状況と研修プログラ
ムの指導者である Teacher Leader による研
修の様子を参観した。実際のプログラム指導
者にインタビューを行ない、このプログラム
についての理解を深めた。さらに、このプロ
グラムで Teacher Leader がどのような訓練を
受けているのかについて調査した。

<10月-(平成 25 年)3月> 区立の小学校
英語講師の土屋佳雅里先生の英語教室で、
Reading Recovery Program の理念と指導方針
に沿った、読み書きを取り入れた英語指導方
法の実践を行った。平成 24 年の実験授業で
は、Washington, D.C. で参加した 2012
Reading Recovery Teacher Leader Institute で購
入した Reading Recovery 用テキストを使って
授業を行った。授業は小学校 5 年生と 6 年生
のいる 3 クラス(合計 14 人)で行った。こ
の期間に授業で扱ったテキストの理解度を
測るために、平成 25 年 2 月に復習テストを
行った。

平成 25 年度

<4月-8月> Reading Recovery Program
に基づき、日本の小学校英語のための指導法
とモデル教材を使った実験授業を行った。2

月に行ったテスト結果から、児童が音声と文字の結びつきの理解が依然と弱いため、テキストの内容が吹き込まれている CD を宿題に出すことにした。Reading Recovery Program で使われているテキストには CD が付いていないため、日本で出版されているテキスト (Oxford Reading Tree) を使って授業を行った。

<9月 - 3月> 引き続き実験授業を行いながら、実験授業で行った指導の効果測定を行い、日本人小学生の英語の読み書きを学ぶ際の難しさについて分析を行った。

児童が音声と文字の結びつきの理解が弱いことが分かり、新しい教材を勉強する傍ら、平成 24 年 2 学期及び 3 学期に勉強したテキストの復習を行い、9 月に再度どのくらい復習の効果があるかを測るために前回と同じテストを実施した。

平成 23 年と 24 年までの研究を著書にまとめ、出版した。この著書では、平成 23 年と 24 年に行ったオーストラリア・ニュージーランド研修、カナダ研修の報告を含む Reading Recovery Program についての解説、平成 24 年から 25 年にかけて実験授業を通して開発した指導方法について説明、今後の日本の小学校英語教育の展望を述べている。

4. 研究成果

3 年間の研究結果は、下記の通りである。

英語圏で英語を主要語とする児童の読み書き回復プログラムとして効果を発揮している Reading Recovery Program について、理解を深めることができた。これまで、ネット検索の結果を主な情報源としてきたが、オーストラリア・ニュージーランド研修、カナダ研修を経て、Reading Recovery Program の指

導理念 (Emergent Literacy) と指導方法

(Roaming around the Known)、教材、さらに教員研修 (RR 教員になる前と RR 教員になってからの教員研修の実態) の詳細について本にまとめた(「5 主な発表論文等」に記載)。

海外研修を通して Reading Recovery Program についての理解を深めることができたため、日本の小学生のための英語指導法には音声言語に読み書きを加えた 4 技能を取り入れた指導法が必要であることを確認することができた。Reading Recovery Program では、言語学習の基本を Context(文脈)の中で音、文字、意味のつながりを教えることとし、4 技能を使ったフォニックス指導、文レベルの理解、談話レベルの理解を盛り込んだ指導法は、日本の英語学習者の指導方法に大いに示唆を与えるものである。

5 学期間実施した実験授業の結果、日本の小学校英語学習者は、やはり音と文字の結びつきについての理解が不足していることが分かった。英語圏での英語指導者らの見解によると、英語は音声と文字が一致しない場合の多い言語であるため、学び始めの段階で音素認識訓練をすることにより英語の読み書きの躓きを取り除き、英語能力を伸ばすことができるとしている。日本の英語を学ぶ小学生の場合も、音声と文字の不一致が英語の苦手意識を引き起こす可能性が高くなることが考えられるため、英語の音声と文字の結びつきについて基本的な知識を習得する必要があることを確認することができた。そのために、英語学習の初期段階でフォニックス指導が必要ではないかという示唆を得た。

教材に関しては、日本の小学生の生活に密接な関係のある内容や既に知っている内容

から異文化に関係する内容へと、既習知識から未習知識へ発展させていくことのできる教材が適しているのではないかと考えるが、今後、日本の小学生への英語指導を続ける過程で更なる調査が必要であろう。

Reading Recovery Program では、教員研修が徹底的に行われている。特に Reading Recovery 教員や Reading Recovery 教員リーダーになるための研修だけでなく、Reading Recovery 教員や Reading Recovery 教員リーダーになってからの定期研修も行われている。生徒の読み書き能力の判断が観察記録によるため、児童が読んでいる間、瞬時に躓きの原因を判断する必要がある。その結果、教員の観察記録のつけ方の訓練が重要となっている。日本の英語指導者も、学習者の言語行動を精査に調査し、躓きの原因を追究し問題解決を助けることのできる指導技術を常日頃から訓練する必要があるのではないかという示唆を得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

小野尚美. (2013). “Roaming around the known” カナダにおける Reading Recovery Program 教員研修から学ぶ<2012 年カナダ(オンタリオ州トロント RR プログラム)研修報告>. 成蹊大学文学部紀要, 第 48 号, 177 - 190. (査読無し)

小野尚美. (2012). “オーストラリア・ニュージーランドにおけるリテラシー教育と Reading Recovery (2011 年オーストラリア・ニュージーランド研修報告). 成蹊英語英文学研究. 第 16 号, 53 - 70. (査読無し)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 2 件)

小野尚美、高梨庸雄. (2014). 『「英語の読み書き」を見直す Reading Recovery Program 研究から日本の早期英語教育への提言』. 東京:金星堂.

渡邊時夫・高梨庸雄・齋藤榮二・酒井英樹. (2013). 『小中連携を意識した中学校英語の改善』. 東京:三省堂.

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1)研究代表者
小野尚美 (成蹊大学)

研究者番号: 10259111

(2)研究分担者
()

研究者番号:

(3)連携研究者
()

研究者番号: